
仮面ライダー

霞我

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー

【Zマーク】

Z7593A

【作者名】

霞我

【あらすじ】

歴代の仮面ライダー達が守ってきた平和はもうくも崩れさつた…
・いまこそ集結せよ！熱き戦士達！

プロローグ（前書き）

仮面ライダー小説です。とりあえずライダーの人数などの問題などからアギトまでです。リクエストがあればその他ライダーも出します。

プロローグ

仮面ライダー・・・

彼等はその時代、この凶悪な組織と戦い、自由を掴み取った。

仮面ライダー、アギトまでの戦いで世界には再び平和が訪れたよう見えた・・・

さつきまで銃声が鳴り続いていた工場で2人の男が煙草を吸っている。

「なあ・・・アレン・・・」

エリック・ウイリアムズは相棒のアレン・ヒューズに呼びかけた。焦つたような、落ち込んだような表情だ。アレンは溜め息をつき、肩まで伸びた金髪をなびかせて振り返った。

そして、相棒の言いたいことをその表情から悟った。

「分かってる、タキの話も全くの嘘じゃなかつたみたいだな」
彼等の足元には蜘蛛の特徴を持つ『人間』の死体が転がっていた。

「じゃあ、整理すると・・・お前達は命令通り、麻薬組織のアジトに侵入し銃撃戦の後、犯人グループを逮捕した・・・ここまでいいか?」所長が眼鏡の奥から彼等を見つめる。「まあそんなとこです」

アレンが頷きながら返事をする。

「で・・・麻薬が隠されていないかアジト内を捜査する内に・・・

例の死体を見つけたんだな」

エリックは頷き、アレンは

「イエス」

と答えた。

所長はゆつくりと溜め息をつき、男の方を見た。

「で、専門家の意見はどうだ? タキ」

タキと呼ばれた男はしばらく黙っていたが、やがて口を開いた。

「まあまたあいつらの力が必要になつた訳ですね」

そう言いながら彼はサングラスを外した。

プロローグ（後書き）

「J感想や「J意見など頂けると幸いです。

第1話 始動

ザワザワと人がせわしなく動く空港で一人の男があぐびをしている。

「ふああ、やっぱ飛行機は好きじゃねえなあ」

FBIからの特別任務を受け、滝和也は再び日本に戻ってきたのだ。彼の任務は世界各地で活躍する仮面ライダーの所在を掴むこと。そしてその仮面ライダーに協力し、近年では非常に高い対怪人戦力を誇る日本の警察と接触することだ。

「全く、本郷や一文字はどこにいるんだろうな・・・」

正直、彼は全く手掛かりを掴んでいなかつた。

(まあとりあえず日本の警察と接触つてのを先に終わらせるかな・

・・)

彼は迎えに来ているはずの男を探す。向こうから誰かが走ってくる。

滝を手を振つて合図する。

事前に滝が紹介を受けていた男だ。

滝和也と氷川誠はガッシリと握手を交わした。

「へええ、あんたが一緒に戦った仮面ライダーはアギトっていうのか」

空港のロビーを歩きながら、彼らは仮面ライダーの話で意気投合していた。

「ハイ！滝さんは？」

氷川が滝に尋ねると滝はどこか楽しそうに

「本郷武と一文字隼人、仮面ライダー1号、2号」
と答える。

「仮面ライダー1号、2号・・・だつたら仮面ライダー達の最初の戦いを共に戦い抜いたんですか！？」

氷川が尊敬の眼差しを滝に向ける。

「まあ・・・そうなるかな」

滝も自慢気に答える。

激しいショッカーとの戦いをライダーと共に戦い抜いたのは彼の掛け替えのない記憶だった。

そして、彼らが空港の玄関にさしかかった時だった。

『キヤアアアア』 突如、女の悲鳴が聞こえた。

「な・・・何だ？」

氷川が振り向いた時、すでに滝は走り出していた。

滝はロビーを駆け抜け、メインフロアにたどり着いた。

「・・・嘘だろ？」

彼は目の前の光景に思わず呟いてしまった。

見覚えのある全身タイツの集団。それは紛れもなく『ショッカー

戦闘員』だった。

第1話 始動（後書き）

更新遅れてしまつてスイマセン・・・といあえずここまで
ご感想くれた方々、励みになります！ありがとうございます！

第2話 衝撃

「チイイイ！」

滝は目の前の戦闘員を殴り倒す。しかし、他の戦闘員達は滝には目もくれず、一般客に襲いかかる。

「ああ・・・クソッ」

滝は戦闘員の攻撃を避けながら、何か良い手はないかと広い床が全て大理石になっているロビーを見回す。ふと隅の方に針葉樹の植木鉢と並んで置いてある消火器に目が行く。

滝はその消火器を掴み、思い切りレバーを押した。

「お前らの相手は俺がしてやりやあ！」

滝の叫び声と共に白粉が噴射する。滝は消火器を振り回し、辺り一面を真っ白にする。

全ての戦闘員が驚いたように滝の方を振り返る、その隙を見て、一般客達は逃げていった。

戦闘員達がじわじわと寄つてくる。

滝は改めて敵の数を数えた。

（大体15人か・・・キツいな）

戦闘員の一人が拳を振り上げる。滝は器用にその一撃を交わし、カウンターを決める。しかし、戦闘員達は素早いチームワークで滝を囲む。

（やばい・・・）滝がそう感じたのと同じタイミングで、後ろの2人の戦闘員が彼を羽交い締めにする。

「チイ！離しやがれ！」

滝は激しく抵抗するが、戦闘員達の腕は緩まない。

一人の戦闘員が滝の前に立ち、攻撃の構えをとる。

滝は痛みに耐えるためにグッと目を閉じ、歯を食いしばった。

『ダダダダダダ』

突然銃を乱射するような音が鳴り響き、滝の周りの数人の戦闘員が倒れた。

「何なんだよ？次は」

滝が目を開き、そして見た物・・青いメカニカルなボディに真っ赤な眼部、先程使用したと思われる煙の吹き出るマシンガン。『G3X』はゆっくりと歩き出した。

滝の周りにいた戦闘員達がG3Xに飛びかかる。しかし、G3Xはたじろぐことなく、戦闘員達をそれぞれ一撃でなぎ倒して行く。

一瞬G3Xの戦いに見とれていた滝も、同じようにG3Xに見とれている戦闘員の腕をすり抜ける。

「イイイイ！」

飛びかかる戦闘員をなぎ倒し、滝はG3Xの隣に走り込む。一瞬G3Xが滝の方に振り向き、飛びかかって来た戦闘員を弾き返しながら叫ぶ。

「大丈夫ですか！？滝さん！」

滝は一瞬驚いた顔になり、G3Xの方を振り向く。

「な・・・お前、氷川か？」

そう返しながら、滝も戦闘員を殴り飛ばす。

「詳しい話はとりあえずコイツら倒してから！」

そう言いながらG3Xは戦闘員の肩に強烈なチョップを決める。

「だな！と言つても、コイツで・・・ラスト！」

滝が目の前の戦闘員の両腕を掴み、背中落としを決める。

「ウ・・・ギギ」

戦闘員は一瞬、もがいたものの、すぐに絶命した。

「ふうう・・・とりあえず終わりだな」

滝が手をパンパンと払いながら言つ。辺りには戦闘員の死骸が散乱している。

「そうですね」G3Xは自らのマスクを外し、『氷川』の顔を現す。

「特殊スース・・・よりすげえよなソリヤ」

滝が憧れの混じったような目で、まだ首から下が『G3X』の氷川を見つめる。

「さつき話したアンノウンとの戦いに対抗するため、日本の警察が作つた新戦力つてどこですかね」

氷川が笑顔を見せながら、その額の汗を拭う。

滝が言葉を返そうとした時、腹部に激痛が走り、血が吹き出た。

「ガツアア・・・」

猛烈な痛さに倒れ込む滝。滝の腹部には長さ15センチもあるような針が刺さっている。

「大丈夫ですか！？」

氷川は滝を守るように体を位置付け、針の飛んできた方向を振り返る。

「反応が鈍いねえ」

氷川が振り返った方向にいた男が一いち方に歩み寄りながら話しかけてくる。

「わあて、ショッカーの恨み、晴らさせてもらおつか・・・」

第2話 衝撃（後書き）

前回更新が遅れてしまったので、なんかいはお詫びの意味も込めて
早めに更新しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7593a/>

仮面ライダー

2010年10月20日19時32分発行